

戦時期台北帝国大学の「学生生活調査」*

鄭麗玲**

はじめに

1920年代後半、日本国内では左右の思想対立と社会運動の対立が日々先鋭化していた。1926年に文部大臣が学生・生徒の左翼思想の研究の禁止を通達し、1928年には数百名の東大生が起訴される三・一五事件が発生した。満洲事変後の学生運動はますます抑圧される状況に陥り、大学の自律と学術研究の自由は干渉され、1933年には京大法学部教授・滝川幸辰の刑法学読本が発禁とされ、40名余りの京大教官が辞表提出などの抗議を行うという京大事件が起こった。1935年、天皇機関説が軍部の右翼過激派に攻撃され、主張者である美濃部達吉は貴族院議員を辞職するに至った。そして1937年12月から38年2月まで続く「人民戦線」事件が発生した¹。東大教授大内兵衛、矢内原忠雄ら左派や自由主義派教授が次々に辞職令を受け、1930年から1940年代前半までに、左派や自由主義派教授の著書は出版を取り締まられるか、自主絶版が求められた²。

1934年、文部省学生部は思想局に組み換えられるが、1938年11月に文部省が大学、高等学校と専門学校を対象に調査を行ったことは時期的に深い意味あいをもつ。この調査は帝国大学7校、官公立大学14校、官公立高等学校28校、官公立専門学校62校、高等師範学校2校、女子高等師範学校2校、水産講習所1校、私立大学および専門学校12校の計128校、対象とされた学生数は63,028人に上り、調査結果は翌年文部省教学局より出版された（以下、全国版と省略）³。

植民地台湾にある台北帝国大学は、文部省の調査に参加した他に、詳細項目を追加し、調査結果を刊行した（以下、台大版と省略）⁴。本論文は、台大版1938年の調査資料と全国版調査との比較を通して、台北帝大生の生活と思考モデルを把握し、植民地台湾の帝国大学と他の帝大との相違を研究する。この年の調査が、戦前における台湾と内地大学生の長期にわたる学生生活を代表することはできないが、戦時期の学生生活と思想変化の観察点として、参照に値すると考える。

* 本論文は国際研究集会「帝国と高等教育—東アジアの文脈から」での発表をもとにしたものです。研究集会では、台湾・日本・韓国の多数の先生から有意義なご指摘をいただきました。また、各種の協力をしてくださった国際日本文化研究センターに感謝を申し上げます。

** 台湾・台北科技大学文化事業発展系教授。

¹ 1938年2月、東京帝大教授大内兵衛、有沢広巳、脇村義太郎等30人余りは二度目の逮捕に追い込まれ、河合栄次郎の著書は発禁となった（桜井恒次『東大生活』東京：現代思想社、1953年、106頁）。これによって、逮捕者は日本共産党員に限らず、非日共である社会主義者にまで拡大され、東大、東北大、九大、法政大学の教授も含まれるようになる。

² 三・一五事件の逮捕と起訴に際しては、雑誌『改造』『中央公論』も処分を受けたと言われている（同前、74-77頁）。

³ 教学局『学生生徒生活調査（上・下）』東京：文部省教学局、1939年。

⁴ 台北帝国大学学生課編『台北帝国大学学生生徒生活調査』台北：台北帝国大学学生課、1939年4月。

1 戦前における学生生活調査とその研究

(1)時代背景

1938年の文部省調査に先立ち、東大は1929、1932、1934年の3回、学生生活および思想観念に関する調査を実施しているが⁵、すべての調査の1年前か当年に、大学教授の集団辞職あるいは学生逮捕事件が発生している。1928年には前述の三・一五事件、1932年には東大血盟団事件、1933年には京大事件があった。

文部省が日中戦争の勃発した1937年の翌年度に行った大規模な「学生生活」調査も、同様の意味をもっている⁶。1938年の調査について、全国版調査報告では「本研究は学生生徒の生活を幅広く各方面より観察し之等を比較総合して其の全般的な動向を明らかにせんがため（以下略）」と記している⁷。台大版も調査から「学生生徒の大体の傾向」を察知し、関心を有せられる方々の参考に供すると説明している⁸。台北帝大の調査は文部省に歩調を合わせて始まったが、結果的に最も徹底的に実施した大学となり、アンケート回収率は9割3分という数字で各帝大中最高率を出した。当時8校あった帝国大学中、調査に参加しなかった京都大学の他、残り7校の回収率は、東京帝大57.37%、東北帝大52.93%、九州帝大63.80%、北海道帝大87.88%、京城帝大87.68%、台北帝大93.83%、大阪帝大87.80%であった⁹。台北帝大学生課は調査終了後、「事変下台湾学生の生活内容—台北帝大学生の生計調査報告」という題名で雑誌に投稿し、「内地の諸大学に於て思想問題に関与せる学生を多数出してゐるのに、本学のみ未だかゝる学生を一人も出すことなく、極めて穏健な学生生活を続け……黙々として勉学してゐるのは誠に喜ぶべき現象である」と紹介している¹⁰。台北帝大の調査からは、文部省への協力だけでなく、大学が台湾にあるため、台北帝大が日中戦争開戦後の学生動態について特別な関心を注いでいたことも見出される。

(2)全国版と台大版の調査項目の相違

全国版と台大版の調査は、2つとも「身上」「生活状況」「学資」の3項目より成る。「身上」とは出身学校、親族の職業などを含む基本的な個人情報に関するものである。この項

⁵ 3回の調査のうち、2回は「生活調査」（東京帝国大学学生課編『東京帝国大学学生生活調査報告—昭和九年十月現在』東京：東京帝国大学、1930年、および同課編『東京帝国大学学生生活調査報告—昭和九年十一月現在』東京：東京帝国大学、1935年）であり、1回は1932年血盟団事件直後に行われた思想運動に対する調査（『昭和七年中に於ける本学内の学生思想運動の概況』東京：東京帝国大学、1933年）である。

⁶ 1930-40年代の学生生活様式と思想観念に関する調査は他に、1935年奥井復太郎・藤林敬三が慶應義塾生の生活と思想を対象とした調査（「学生生活の思想的方面の一調査」『三田学会雑誌』第29巻第10号、東京：慶應義塾経済学会、1935年、41-110頁）、桐原葆見の多地域の青年学校学生を対象にした調査（「青年の読書に関する調査」『労働科学研究』1939年9月号、東京：労働科学研究所、1-10頁）や、海後宗臣・吉田昇が行った学生の読書、運動、文芸活動に関する調査研究（『学生生活調査』東京：日本評論社、1943年）がある。

⁷ 教学局『学生生徒生活調査（上）』「はしがき」より。

⁸ 台北帝国大学学生課編『学生生徒生活調査』「はしがき」より。下線は筆者による。

⁹ 帝国の辺境に位置し、創立が遅ければ遅いほど、回収率が高い傾向が見られる。この現象は帝大の位置する地域における官僚の政治力を意味していると同時に、大学自治力の未熟さも反映している。教学局『学生生徒生活調査（下）』、2頁。

¹⁰ 牟田恒義「事変下台湾学生の生活内容—台北帝大学生の生計調査報告」『台湾時報』1939年第6号、台北：台湾時報、149頁。

目における台大版独自の内容としては、「出生地」「支那事変ニ応召セル家族」「卒業後ノ方針」の3項目を追加している。出生地の調査は台湾籍と日本籍を区別するためである。当時の在台日本人二世は戦後の国府における「外省人」に似て、台湾で生まれても日本内地の住所で本籍を登録していた。「身上」部分の調査資料は本稿第4章で詳しく分析する。

調査票の第二項は「生活状況」に関する項目である。台大版の調査は合わせて13項目を設けており、内容が詳細で参照価値が非常に高い。13項目は「住所」「通学」「食事」「健康」「趣味娯楽」¹²「嗜好」「学習」「読書」「修養」「宗教」「団体」「休暇」¹³「友人」である。各項目内にはさらに細かい調査項目を設け、例えば「団体」は学内外において何らかの団体に参加しているか否かについて、まず「学内」と「学外」の2項で区別し、さらにその下位項目として「研究団体」「修養団体」「趣味団体」「体育団体」の4つに細かく分けている。全国版では「団体」と「友人」の項目は見られず、「興味娯楽」と「読書」に関する調査項目もより大雑把である。

2つの調査票の第三項はいずれも「学資」で、生活費・学費・書籍等の収入と支出の概況調査であり、両者にあまり大きな区別は見られないので、紙面の関係から本稿では分析を省略する。台大版の調査参加範囲は3学部中、文政学部62人(女子学生1人を含む)、理農学部46人、医学部105人、計212人である。他に2専門部中、付属農林143人、付属医専173人で、全参加学生数は529人である。

生活調査票

◎裏面注意事項参照

身	大專	出身学校	年齢	出生地	父兄現住所	自家ノ所在地	父兄職業	電	家	支那事變ニ應召セル家族	家計ノ程度	卒業後ノ方針
	部科	昭和	(數~年)	内地	府縣	都市	市	有	祖父母兄弟姉妹	()	從軍中、病氣	家親ヨリ學費支給
上	中等校卒業	中等校卒業(修了)	後高等大學迄ノ年限	高專卒業	後大學迄ノ年限	高專卒業	後大學迄ノ年限	有無	深父母妻子女	負傷、戰死	家親ヨリ學費支給	程度
	四年修了	0	1	2	3	0	1	2	3	有無	(期間)	月
生	住所	出	前	丁目	番地	方)宅、親戚、知人、借家、寄宿舎、私設室、下宿、寮、友人下宿、借間、アパート						
	通学	乗車利用	バス	電車	(所要時間)	時	分	自轉車(所要時間)	時	分	徒歩(所要時間)	時
活	食事	朝食	中食	夕食	食(學内食堂、附食、學外、)	夕食						
	健康	在學方法	其	他	カス、ナラズ	脚腕時間(日)	時	分				
状	趣味娯楽	趣味娯樂ノ種類	好ム娯樂ノ種類									
	嗜好	煙草(喫ム、喫マズ)	酒類(飲ム、飲マズ)									
況	學習	講義外ノ一日平均勉強時間										
	團體	愛讀ノ種類	愛讀書名其ノ著者									
友	宗教	自己ノ宗教	家庭ノ宗教									
	團體	學内及學外ニ於テ加入セル部、會	學内	(修養團體)	(修養團體)	(修養團體)						
人	休暇	今年ノ暑中休暇ヲ主トシテ何ヲ利用シタカ										
	友人	大學ニ於ケル親友ノ種類(其ノ種類、學内、學外ニ於テ得タル者、其他)										

図1 1938年台北帝国大の「生活調査票」

台北帝国大学学生課編『台北帝国大学学生生徒生活調査』ページ数なし。

¹¹ 台大版調査票の注意事項では、散歩・ランニングなどスポーツ機材を必要としない内容は「健康」に、スポーツ機材の必要な内容は「運動」に属すると説明している。

¹² 「興味娯楽」の欄では好きな映画を海外と日本とで区別し、ニュース映画、文化教育、情操、人情、戦争、剣劇等の映画のジャンルを付記するようにしている。また、好きな音楽の項目では、注に和楽・洋楽の区別と楽器の種類を記すようにしている。

¹³ 夏季休暇の過ごし方に関する調査。

台大版の生活状況に関する詳細な調査票は、1940-1942年の海後・吉田の調査票と類似している（図2を参照）。両者とも伝統的な理念、例えば家庭、交友、書籍が学生生活と価値観に与える影響等を重視し、同時に新聞、映画など近代的メディアの重要性も見過ごしてはいない。以下ではまず、調査票の第2項である「生活状況」に属する各項目から、台北帝大各学部および付属専門部に所属する学生の生活・思想理念に関する結果を、他の帝大との差異も考慮して比較する。

學生生活調査票

1. 姓名		2. 性別		3. 年齢		4. 学年		5. 学号	
6. 現在住居		7. 職業		8. 親戚		9. 友人		10. 宗教	
11. 読書		12. 新聞		13. 映画		14. 音楽		15. その他	
16. 運動		17. 娯楽		18. 交友		19. 家庭		20. その他	

事項	内容	時間	場所	共ニシテモノ
昨日	起床	前夜夜 時間	分	
	家事	前夜夜 時間	分	
昨日	食事	前夜夜 時間	分	
	洗濯	前夜夜 時間	分	
昨日	散歩	前夜夜 時間	分	
	読書	前夜夜 時間	分	
昨日	新聞	前夜夜 時間	分	
	映画	前夜夜 時間	分	
昨日	音楽	前夜夜 時間	分	
	その他	前夜夜 時間	分	
昨日	運動	前夜夜 時間	分	
	娯楽	前夜夜 時間	分	
昨日	交友	前夜夜 時間	分	
	家庭	前夜夜 時間	分	
昨日	その他	前夜夜 時間	分	
		前夜夜 時間	分	

図2 海後宗臣・吉田昇「学生生活調査票」

海後・吉田『学生生活調査』、10頁以降。

2 運動、趣味娯楽と教養文化

(1) 運動に関する調査について

1920年代、各大学には多数の思想研究団体が設けられ、例えば東京帝大の社会科学研究会や東北帝大の社会問題研究会などがあった。このような団体に対して、文部省は当初消極的な黙認態度で対応していたが、1924年以降、各大学における思想研究サークルに関しては、「思想善導」の名義の下で積極的に関与していった¹⁴。1920年代からの読書会や学生演劇を取り締まるため、1930年代に入ってから、国は団体競技を奨励する姿勢

¹⁴ 1924年、清浦内閣の文部大臣江木千之および加藤孝明内閣の文部大臣岡田良平は共に、「国民精神作興ニ関スル詔書」にいう「時弊」を教育から排除すべく、高等学校および大学内の左翼思想を管理し始めると同時に軍事教育を導入した。

を取った。大学生の学生演劇は多く西洋リアリズム文学から題材を採り、読書会は左派の書物研究を行っていた。体育と国家防衛は親和的關係にあり、射撃、馬術など「国防競技」色の濃いスポーツが重視された。1938年の調査中、大学生の好きなスポーツに関しては、全国版7帝大で野球、テニス、スケート、水泳、卓球という順位であった¹⁵。2つの専門部を除く台北帝大の結果は、最も人気のスポーツベスト5をテニス、卓球、野球、水泳、馬術が占めていた¹⁶。そのうち、テニスと卓球は対一のスポーツで、野球に比べて人数と場所の制限が少ないため、台北帝大生に人気のスポーツの1位と2位となっていた。学部別の統計を見れば、最も特殊な結果は付属農林専門部の馬術とテニスと共に1位であることである。農林専門部では日本人学生が多く、医学専門部では台湾人学生が多かったこともあり、両専門部の結果は大きく異なっている。

(2) 趣味娯楽

台大版では趣味娯楽に、「趣味娯楽ノ種類」「好ム音楽ノ種類」「好ム映画ノ種類」「一箇月平均鑑賞回数」の記入項目があり、娯楽調査における映画への注目度が窺える。全国版は映画を趣味娯楽の一選択肢と位置づけるのみで、鑑賞した映画の種類、回数、邦画か洋画かを問う項目はないが、やはり映画関係の回答率が一番高いことから、当時高等教育を受けた学生の間での映画の流行が読み取れる。またこの調査からは、台北帝大生の月平均鑑賞数は2.9作、その中でも理農学部の平均3.2作が最も多いことが分かる¹⁷。1940-1942年の海後と吉田による生活調査では、18-20歳の青年学生の月映画鑑賞数が2作であることから、台北帝大の調査結果は日本内地青年の平均を大きく上回ることが明らかになった。

映画は1895年に神戸に登場して以来、1930年代にはすでに広く普及し、近代国家の宣伝メディアとしても活躍した。当時の学生の邦画と洋画の鑑賞事情に関する研究には、同時代の研究者海後と吉田によるものがあるが、西洋の映画・書籍と、日本の映画・書籍を対比し、高等教育を受けた学生ほど邦画より洋画を好み、外国の訳書を多く読んでいることから、日本文化が軽視されているという結論を出した¹⁸。1938年の台北帝大生の全体状況に関する調査でも、学生の洋画鑑賞率は確かに邦画鑑賞率より高かった。1930

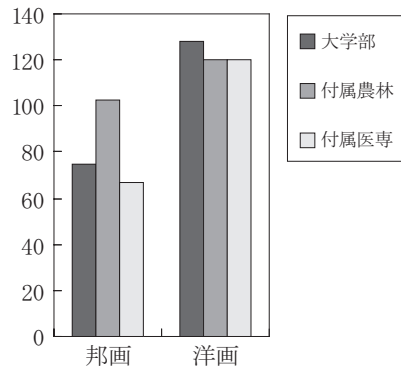


図3 台北帝大・学部と付属専門部の邦画・洋画鑑賞総数

台北帝国大学学生課編『台北帝国大学学生生活調査』、24-25頁より作成。

¹⁵ 教学局、前書、176頁。

¹⁶ 台北帝国大学学生課編、前書、23頁。テニスと野球は当時台湾で大変流行し、テニスにおける台湾人選手の成績は非常に良かったという。この2つのスポーツ史に関しては、林丁国「日治時期台湾網球と棒球運動の島内外競争表現」(『台湾史研究』第16巻第4期、台北：中央研究院台史所、2009年12月、37-45頁)が詳しい。

¹⁷ 台北帝国大学学生課編、前書、24-25頁。

¹⁸ 海後宗臣・吉田昇、前書、86、290頁。

年代の台湾映画界の輸入状況を見ると、日本映画が80%を占め、外国映画では、中国製・アメリカ製が各10%であった¹⁹。その後、国は映画の輸入にさらなる制限をかけたが、上映比率に大差があるにもかかわらず、台北帝大生の鑑賞した洋画は邦画の数を超えていた。帝大生の洋画に対する熱意がよくわかる。学部別の調査からは、洋画を好む確率の最も高いのは付属医学専門部であり、洋画と邦画の比率は約54:46であった。付属農林は台北帝大生の中で、邦画鑑賞率の最も高い学部であり、邦画と洋画の比率は約64:36であった。2つの付属専門部の映画鑑賞に関する差異は、就学生の民族構成に関係があるだろう。付属医専は台湾人学生が最も多かったので、邦画に対する興味は日本人学生の多かった付属農林の平均値より遥かに低い²⁰。特に、日本映画は戦争宣伝の意味を持つニュース映画が大半だったため、そのような差がさらに拡張された。

学生の好む映画のジャンルについては、邦画はニュース映画が最も人気で、洋画は情操映画（主に激励系の映画）、人情映画（主に人間感情、恋愛などを題材とした劇映画）が1位と2位で、ニュース映画は3位であった²¹。前述の通り、邦画鑑賞率の最も高い農林専門部の学生が観た日本映画はニュース映画を中心としていた。映画は誕生してからわずかの間に近代国家の宣伝メディアとなっていた。現在残っている台湾の初期映画資料を見ても、総督府が撮影したドキュメンタリーは数多い。1930年代後期、朝日新聞社・読売新聞社・大阪毎日新聞社など大手メディアはことごとく戦争宣伝用のニュース映画を製作している。1937年のニュース映画の盛んな状況を語る報道に「台北のニュース映画会は連週、例外なしの超満員で、十月に入って一日で一万二千名の入場者を挙げ……この頃では国産のトーキーニュースは殆ど支那事変特報で……²²」とあるように、当時の台湾ではニュース映画が大いに人気を博した。

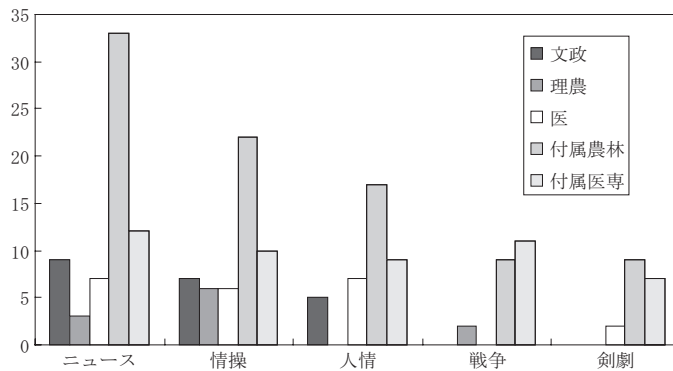


図4 学部別映画鑑賞ジャンル（邦画）

¹⁹ 葉龍彦『日治時期台湾電影史』台北：星月書房、1998年、123頁。

²⁰ 日本占領期の台湾知識人も映画に関する回想で洋画を多くとりあげている。例えば、林衡道は1920年に「レ・ミゼラブル」が台湾で上映された時、毎晩満員が続き、チャップリンの映画も非常に魅力的であったという。また、陳逸松もその回想録で、留日学生が比較的多く鑑賞していたのはアメリカの西部映画だったと記している。葉龍彦、前書、128-129頁より。

²¹ 情操映画と人情映画は共に劇映画に属する。1938年調査の前後には台湾で製作された劇映画「嗚呼！芝山巖」「南國之花」「望春風」「榮譽軍夫」などがあり、この分類に入る。

²² 原保夫「時局とニュース映画」『台湾時報』1937年11月、74頁。

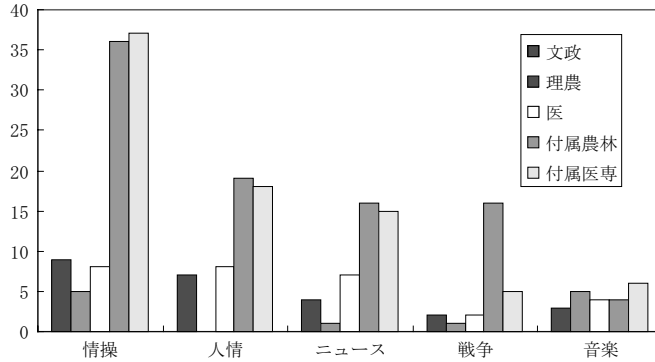


図5 学部別映画鑑賞ジャンル（洋画）

台北帝国大学学生課編『台北帝国大学学生生活調査』、24-25頁より作成。

全国版と台大版の調査資料は共に映画名までは表記していないが、当時ドイツと日本で流行したニュース映画の内容から推測すれば、台北帝大の学生が鑑賞していた作品も、「オリンピア」（レニ・リーフェンシュタール監督の1936年ベルリンオリンピックの宣伝映画）、「意志の勝利」、あるいは日本製の「守れ！満蒙」「輝く皇軍」、さらに台湾総督府の製作した「日本統治下の台湾」「時局下の台湾」「台湾画報」「高砂族素描」「前進台湾」等の記録／政策宣伝用の映画であったと思われる²³。図6は台北帝国大予科生が1940年代に国際館映画館前で撮った写真であるが、背後の宣伝画に描かれている「陸軍航空戦記」²⁴も当時ブームとなった日本ニュース映画のひとつである。

映画は「文芸活動」項の第1位だが、そのあとに音楽鑑賞と写真撮影が続く。室内競技では囲碁、ビリヤード、将棋が上位ベスト3を占め、屋外スポーツでは釣りやランニングが人気だった。好みの西洋楽器はバイオリン、ピアノとギター、和楽器は尺八と三味線とい



図6 台大予科生の国際館映画館（今の西門町萬年大樓）前での写真

台大校史館編著『青春記憶・老台大』、2011年、92頁より。

²³ 1930年代に台湾で撮影された記録映画については、葉龍彦の前書、244-260頁が詳しい。

²⁴ 「陸軍航空戦記」は日本映画社による作品である。日本映画社は1941年にいくつかの映画会社の統合によって設立され、週一作のペースでニュース映画および宣伝用の映画を制作していた。「陸軍航空戦記」の音楽は台湾の音楽家江文也によるものである。

う結果であった²⁵。このような趣味や活動には経済力が求められ、一般大衆層がたしなむのは難しかっただろう。

(3)人物崇拜に関する調査について

台大版の「修養」に関する調査は、修養の「方法」と「崇拜スル人物」に分かれる。当時の政府・研究者は、「武道」「神社参拝」「精神講話」を国家意識を高める修養活動と見なしていた²⁶。台大版調査結果のこの3項では、付属農林専門部が計11.19%で最も高い比率を示していた。「崇拜スル人物」欄での台大版の上位4名は西郷隆盛(54票)、野口英世(25票)、乃木希典(17票)、東郷平八郎(13票)であった²⁷。台大版ではこの欄への反応が少なく、315名もの学生が崇拜対象はないと回答している。本稿において崇拜人物の順位を取り上げ、それらの表す文化現象の分析を試みたが、この315名の回答も考慮すると、まだ留保する必要があるだろう。

西郷、乃木および東郷は明治維新時代の人物であり、日本の陸軍・海軍を代表する名将である。2位の野口英世は、医学部や付属医学専門部に所属する未来の医師たちから投票が集中し、学科的特徴を持つ結果となった。第4位の乃木希典は明治期の知名の士で、三代目台湾総督でもある。唯一明治期の人物でないのは、第5位の楠木正成(7票、1294-1358)である。楠木は「天皇に忠実」という武士道精神のイメージから近代的教育の場で多く取り上げられ、(台湾の)中等学校が日本内地で行った修学旅行では、楠木を祀る神戸湊川神社、東京の皇居外苑二重橋付近の楠木正成像、乃木神社、乃木旧居などの見学が定番となっていた。「崇拜スル人物」の記入欄からは、調査対象の受けてきた小・中学校教育の価値観の影響が窺える。

全国版調査における同様の項目は「尊敬し淑する人物」とされており、帝大生の回答中上位5名は西郷隆盛、野口英世、乃木希典、吉田松陰、楠木正成であった。台大版の東郷平八郎が吉田松陰に置き換えられているほかは、人物と順位が全く同じである。台大版の票数はそれほど多くないが、他の帝大生と反応がほぼ同じであることが分かった²⁸。ここに登場した人物は、野口英世以外は全て武将であり、明らかに戦争の影響が見られる。一部の学生は国粋思想と軍国思想に傾き、マルクスの著作に浸っていた過去の左派青年像とは大きく隔たっていた。崇拜人物に関する調査で全国版と台大版がかなりの一致を示したことは、この質問が自由回答であったことも含め、1930-40年代に高等教育を受けた青年学生の価値観の共通性を明らかにしている。また、台大版では楠木と同じ

²⁵ 呂紹理が1935年に出版した『台湾人士鑑』を参照してまとめた、台北州と台中州の台湾名士の趣味に関するデータを見れば、読書、音楽、旅行、運動、登山、書道と絵画、囲碁等が人気であった。呂紹理「日治時期台湾的休閒生活与商業活動」『台湾商業伝統論文集』1999年5月、371-378頁より。同論文の分析対象は、本論文の述べる帝大生たちの父親に当たる世代で、伝統的な農村地主と近代教育を受けた名士が多い。本論文の大学生が持つ興味と比較すると、世代間のギャップは一目瞭然である。1930年代の大学生が趣味とする写真撮影、映画、ビリヤード等は『台湾人士鑑』ではあまり見られない。ただ、『台湾人士鑑』の趣味に関する項目の設定は大雑把であり、テニスや馬術の記入はスポーツ類として統一されていないかった。

²⁶ 海後・吉田、前書、187、196頁による。

²⁷ 票数はカッコ内に表示する。以下同。

²⁸ 吉田松陰の台大版票数は5票だった。

く5位に、孔子とヒトラーが挙げられている。ヒトラーに最も多くの票を投じた学部は農林専門部（4票）で、孔子は医学部と医学専門部より票を得ていた（各3票）。

(4)読書調査に関する分析

大正時代と昭和の戦前期は、高等学校や大学が教養主義を文化的伝統としていた時代であり、西洋の名著を読むことと思弁力が重視されていたため、高・大生は学業の合間に広く総合雑誌や単行本を閲読していた。総合雑誌は政治・経済・社会・文化など各領域にわたる水準の高い評論、随筆や創作を掲載していた。このような雑誌類は「硬派」と称され、その中でも『中央公論』『改造』『日本評論』が権威とされていた²⁹。これらの雑誌は積極的に左派・自由主義思想家、理論家の評論を掲載したため、1930年代以降は常に批判的の的とされた。1938年台大版の読書調査は区分設定が細かく、新聞・雑誌・書籍類のタイトルから、愛読している書物や雑誌の著者に関する項目まであり、さらに新聞愛読欄のランキング調査も行っていた。

1)新聞閲読に関する台湾と日本内地の差異

新聞の「閲読」に関する調査では、『台湾日日新報』『大阪朝日新聞』『大阪毎日新聞』『東京朝日新聞』『台湾新民報』の5紙が台北帝大生が最も頻繁に読む新聞として挙げられ、全国版と大きく異なった。全国版では「平素読書せる新聞」の欄の下に、『東京朝日新聞』『大阪朝日新聞』『東京日日新聞』『読売新聞』『東京帝国大学新聞』という結果がある。1940-1942年に日本内地で行われた中等学校以上の学生を対象にした調査でも、上位から『朝日新聞』『東京日日』という順であった³⁰。台大版の調査では、地元発行の『台湾日日新報』が圧倒的な人気であった。台湾では相対的に地方紙の購読者数が全国紙を上回り、政治色の濃い『台湾日日新報』が単独で最多である。植民地帝大生の新聞閲読に関する内地との相違は、中央に対抗する意識というよりは、運送技術の遅れが原因と言えよう³¹。

新聞閲読に関して特殊な回答を出したのは医学専門で、全大学総順位で5位となった『台湾新民報』が医専単独の順位では2位（14.5%）となっており、『大阪朝日新聞』と同位であった。しかし、付属農林ではその数字が0で、付属専門部の2学部の結果は極端に分かれた。医学専門部では台湾人学生の数が日本人より多いので、台湾人経営の新聞に対する支持率も高かったと考えられる。同じく、台湾人学生の多い台北帝大医学部で

²⁹ 1925年から1935年にかけての日本資本主義論争は、いわゆる「講座派」と「労農派」に分かれており、前者は岩波書店による出版物および著者群を代表とし、後者は雑誌『労農』の同人らを中心としていた。双方による論争とその論理は、様々な総合雑誌の巻頭論文に常に出現し、当時の高校生や大学生に影響を与えていた。竹内洋『教養主義の没落』東京：中央公論新社、2007年第9版、13-14頁より。

³⁰ 海後宗臣・吉田昇の前書、204頁を参照。1943年に海後・吉田が同書を出版する際に『東京日日』（東京日日新聞）を『東京大毎』としたのは、当年東京日日新聞と大阪毎日新聞が新聞紙統合政策の下で「毎日新聞」に合併されたためである。

³¹ 李承機の研究によれば、台湾の読者が日本内地の出版物を読むには、船便と検閲、配送にかかる時間を合わせると少なくとも出版日より3日の遅れが生じた。1930年代、『大阪朝日新聞』と『大阪毎日新聞』は空運を試み、運送時間を短縮し、発行当日の夕方に新聞を台湾読者のもとへ届けることに成功した。しかし、長期配送において空運を用いていたかについては意見を保留する。李承機「1930年代台湾における「読者大衆」の出現—新聞市場の競争化から考える植民地のモダンティ」（呉密察・垂水千恵編『記憶する台湾』東京大学出版会、2005年、262-264頁に収録）を参照。

も『台湾新民報』の購読率が『東京朝日』を上回り、第4位となっていた。新聞専門欄に関する調査では、政治・経済・軍事・社会・学芸・スポーツ・娯楽・家庭・小説・碁・将棋という選択肢を並べたが、学部によって著しく違いが現れた。新聞愛読欄の順位の結果は以下の通りである。文政学部：政治(1)、軍事(2)、社会(2)、経済(4)、学芸(5)、スポーツ(6)³²。理農学部：学芸(1)、政治(2)、軍事(3)、スポーツ(4)、社会(5)、経済(6)。医学部：社会(1)、学芸(2)、軍事(3)、政治(4)、スポーツ(5)、娯楽(6)。医学部と医学専門部は経済が上位6位に入っておらず、医学専門部の順位は医学部と類似し、社会(1)、軍事(2)、学芸(3)、政治(3)、スポーツ(5)、娯楽(6)である。農林専門部の順位は軍事(1)、社会(2)、政治(3)、スポーツ(4)、学芸(5)、経済(6)である。文政学部の新聞閲読は「硬派」的であり、政治、経済、軍事等、国家の問題を重視した。理農学部は軟派な学芸を好み、その後に政治、軍事、社会が続き、スポーツと娯楽にも興味を持っていた。軍事報道に興味が高いのは付属農林専門部で、これは将来の計画に関する調査(本稿第4章にて分析)で中国や海外へという回答の比率が高い結果とも関連している。

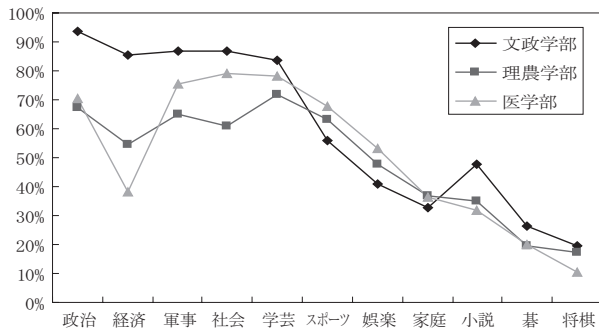


図7 台北帝大生の新聞愛読欄順位に関する調査

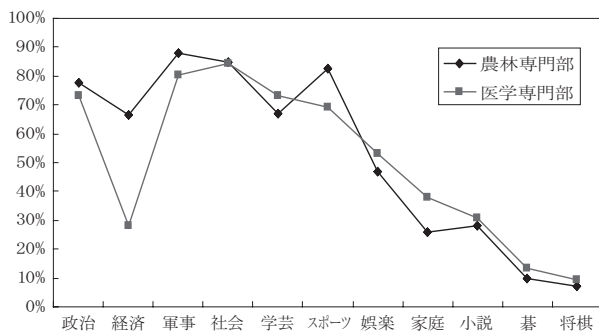


図8 付属農林、医専の新聞愛読欄順位に関する調査

台北帝国大学学生課編『台北帝国大学学生生徒生活調査』、36-37頁より作成。

³² カッコ内の数字は順位を表す。同じ数字は同じ順位で、例えば2つの(2)は2項とも2位であることを示す。以下同。

2) 雑誌購読に関する順位

雑誌に関する調査は、全国版では「愛読雑誌」という項目になっており、台大版の「購読雑誌」と少し異なる³³。台北帝大生の購読雑誌上位5位は『中央公論』(48)、『改造』(37)、『文芸春秋』(37)、『日本評論』(19)、『キング』(17)である³⁴。全国版は『中央公論』(2378)、『文芸春秋』(1886)、『改造』(1779)、『エコノミスト』³⁵(269)、『科学ペン』³⁶(239)という結果であった。台北帝大生の雑誌購読事情は日本内地の大学とほぼ一致している。2つの付属専門部を加えれば、台大版の順位は『キング』(109)が1位となり、2位の『中央公論』(70)より遥かに票数が多い。次いで『文芸春秋』(62)、『改造』(56)、『日本評論』(20)となっており、この順位は1934年東京市内6図書館で行われた読者の愛読雑誌に関する調査の結果に近い。1934年の調査で19-24歳の青年が愛読する雑誌の上位5位は『キング』『中央公論』『改造』『文芸春秋』『日出』であった³⁷。この5種類は『キング』が大衆雑誌である他はすべて総合雑誌に属する。

『キング』は1924年11月に大日本雄弁会講談社(現講談社)の代表的刊行物として創刊され、日本出版史上初めて発行部数が100万部を突破した雑誌として有名であり、1928年11月の増刊号は150万部を超えている。第3号の表紙では、紙面の半分以上を用いて帝大の制服を着た大学生の絵を載せ、帝大生の愛読雑誌としての『キング』イメージを作り上げている³⁸。当時の雑誌閲(購)読調査によっても、『キング』読者には多く大学生が含まれていた。1929年東京帝大学生課の「学生生活調査」では、『キング』は購読雑誌のベスト10に入っている³⁹。京都地方の新聞記事によると、京都帝大の企画した学生の読書に関する調査でも、『キング』読者が予想より多くいた。1930年代以降、『キング』は時勢に合わせた内容を多く企画し、例えば1933年には「雑誌報国」のため、「映画国策」の名の下で時勢に合わせた映画小説を掲載している⁴⁰。

『キング』ブームは知識人の読書が娯楽化する傾向を示している。2つの専門部を含む台北帝大生の読書趣味は、日本内地の帝大、官公立大学・高校や専門学校に比べ、一般民衆の読書趣味により近い。『キング』の大学生間の流行は、『中央公論』等総合雑誌の地位をも脅かさんとするものだった。河合栄次郎は1937年の時点で、「昭和四年以来の就職難は学生に就職試験の為の準備として雑誌を購読させる傾向を刺戟し、殊に口答試問の際の応答の必要から『中央公論』と『キング』を併読することが最も常識的であるとされ」ていた、と指摘している⁴¹。当時の国体中心論を中心とする輿論は、高校・帝大生の

³³ 台大版の新聞・雑誌に関しては「購読新聞」「購読雑誌」で調査し、書籍については「愛読書名」で調査している。これは、「購読」と「愛読」の程度を区別するように意図的に作られた項目である。

³⁴ カッコ内は票数。以下同。

³⁵ 『エコノミスト』、別名『The Economist』、大阪毎日新聞社より出版。創刊は1923年(大正12年、1年1号)4月。1943年(昭和18年、21年4号)以降は毎日新聞社発行の『経済毎日』とされ、1945年(昭和20年)12月まで続いた。

³⁶ 『科学ペン』、東京三省堂より出版。創刊は1936年10月。1941年12月(6巻12号)以降は東京科学思潮社の『科学思想』に継承された。

³⁷ 佐藤卓己『『キング』の時代—国民大衆雑誌の公共性』岩波書店、2002年、57頁。

³⁸ 表紙に掲載された「春郊」は藤島武治(1867-1943)の作品である。藤島は当時日本の西洋絵画界で重要な地位にあり、台展の審査員でもあった。佐藤卓己、前書、55、58頁。

³⁹ 永嶺重敏、前書、138頁。

⁴⁰ 佐藤卓己、前書、XV頁。

⁴¹ 河合栄次郎編『学生と生活』東京：日本評論社、1937年、440-441頁。本書は1938年の学生愛読書籍の調査でも、上位にランクされている。

教養文化を批判し、「教養文化を代表する総合雑誌が調子に乗ったニヒルな文化を過度に主張したため、日本の青年は現代日本社会を把握出来ず、国の現状を無視している」と攻撃した。河合の評論から、このような輿論はすでに当時の就職面接に影響を与え、学生思潮が右へ転換していることがわかる。1920-1930年代『キング』の売上増加は、「雑誌『キング』は資本主義の経営法を以て左翼雑誌に勝利し、民衆の教化主導権を獲得したと同時に、左翼雑誌を「『キング』化」する方向に導いた」⁴²ことを証明した。今回の調査から、『キング』は高校・大学生の読書リストに名を連ね、実質的に左翼雑誌の読者階層にまで食い込んでいたことが明らかになった。

3) 好む書籍と著者

台北帝大生の愛読する書籍としては小説が最も多かった。学部学生は日本の小説より外国小説をやや多く読み、2つの専門部学生は日本の小説を主に読むという結果であった。専門部の学生を含め、最も人気のある5冊はパール・バック『大地』(11)⁴³、火野葦平『麦と兵隊』(6)、『人生論』(5)、石坂洋二郎『若い人』(4)、ドストエフスキー『カラマーゾフの兄弟』(3)であった。台北帝大生の投票は非常に分散しており、2票を超えた作品は『人生論』『カラマーゾフの兄弟』『蒼氓』『学生生活』の4作のみであった⁴⁴。台北帝大にとって読書に関する調査の目的は、学生が自ら書き込んだ愛読書の内容から学生思想理念を探ることであった。学生課は調査後に「注意を要するやうな思想書の名を見ず、寧ろ宗教的なもの或は倫理道德に関するもの等が相当あるのは、堅実なる読者傾向を示すもの」と評価している⁴⁵。これは、1938年頃の大学の学生思想動態に対する不安と、「生活」の名義で行われた調査の背後にある複雑な動機を示している。

全国版の帝大生読書調査は、「最近読みて感銘を受けたる書籍」という項目で問い掛け、結果の上位5位は火野葦平『麦と兵隊』(1212)、『土と兵隊』(819)、島木健作『生活の探求』(596)、『キュリー夫人伝』(139)と『大地』(139)であった。火野葦平の兵隊シリーズと島木健作の転向文学『生活の探求』は当時のベストセラーであった。2000年に新潮文庫が企画した20世紀の100冊では、1901-2000年の年度毎の代表作品を選出しているが、1937年の代表作には石坂洋次郎の『若い人』が選ばれ、1938年は火野葦平の『麦と兵隊』だった。ここでは新潮文庫の選出基準を問わないが、この2作品の当時における代表性が窺える。2つの付属専門部を含む台北帝大生の愛読作家上位5位は、夏目漱石(19)、トルストイ(15)、パール・バック(12)、芥川龍之介(10)、火野葦平(9)であった。パール・バックとその作品が入選した理由としては、1937年日中戦争の勃発によって青年たちが中国社会に興味を持つようになったことと、調査年(1938年)にパール・バックがノーベル文学賞を受賞したことが考えられる。

⁴² 陳培豊「植民地大衆の争奪」『台湾文学研究学報』第九期、台南：国立台湾文学館、2009年10月、249頁。

⁴³ カッコ内は購読人数。以下同。

⁴⁴ 書籍に対する投票は分散し、全体を代表するものがないため、安易に分析することが出来ない。本文ではデータの参考と今後の分析のため、書籍あるいは著者の得票数を記す。

⁴⁵ 牟田恒義「事变下台湾学生の生活内容—台北帝国大学生の生計調査報告」、前引用書、144-149頁。

4 就職に関する調査と実際の就職状況

(1) 帝大生の出身背景

帝国大学群は戦前の日本における高等教育の頂点であり、植民地台湾にあった台北帝国大は学生数がさらに少なかったため、少数精鋭主義の空気が濃厚であった。生活調査における父兄の職業欄は選択肢なしの自由書き込み式であった。分析の便宜のため、ここでは回答項目を12種にまとめた⁴⁶。

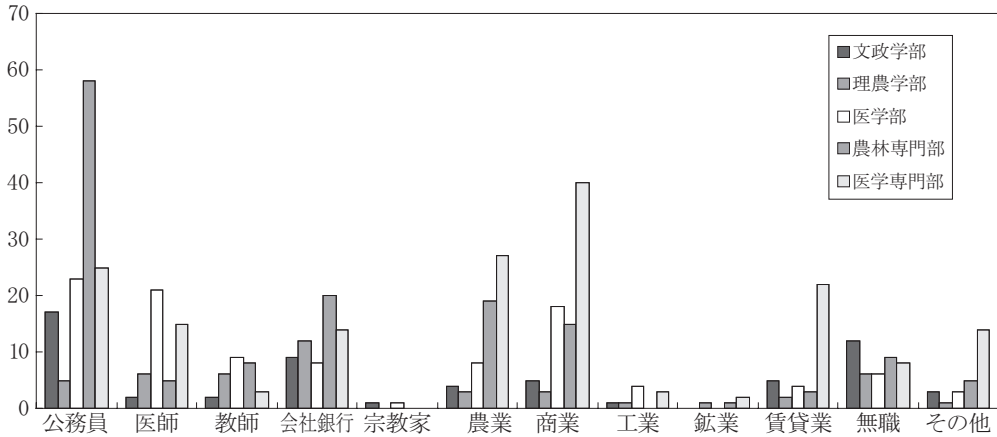


図9 台北帝大各学部と両付属専門部生の父兄の職業に関する棒グラフ（数字は人数）

台北帝国大学学生課編『台北帝国大学学生生活調査』、7頁より作成。

全体として帝大生の出身家庭を見ると、公務員・医師・教師・会社員・銀行員等、中産階級が50.74%を占め、半数を超えている。貸貸業と無職にも一部台湾伝統地主や名士が含まれている可能性があるが、この2種は15.75%を占めている⁴⁷。農林専門部では40%以上が公務員家庭の出身で、医師・公務員・教師・会社員・銀行員等と答えた中産階級以上の出身者は63%で半数を超え、学内で最も高い比率である。文政、理農両学部生の出身家庭状況は付属農林と類似している。しかし付属医学専門部に関しては、公務員・医師・教師・会社員・銀行員を父兄に持つ割合は僅か32.94%で付属農林の半分であり、平均値に程遠い一方、貸貸業の比率が20.81%に達し、医学専門部の第4位として、他学部と差をつけている。医学部学生の出身家庭は公務員と医師に集中しており、合わせて45%に達する。確かに、当時の台湾公務員には日本人が多かった。帝大医学部は台湾人学生と日本人学生が共に目指す最高学府であったが、台湾人地主や伝統的な知識人家庭出身学生の一部にはやや妥協して医学専門部を選択した者もいたのである。

⁴⁶ 本稿では回答の人数が1であった軍人を公務員に統合し、2であった代書を弁護士に統合した。他に宗教家、土地仲介、建物貸貸業、土木建築商、旅館、遊技上等一部の特殊な職業を一つにまとめ、無職を加えた。

⁴⁷ 実際「農業」と回答した人の中にも、穀物販売をしていた伝統的地主階級が含まれている。よって、父兄の職業に関して、伝統的地主層は15.75%を上回っているはずである。

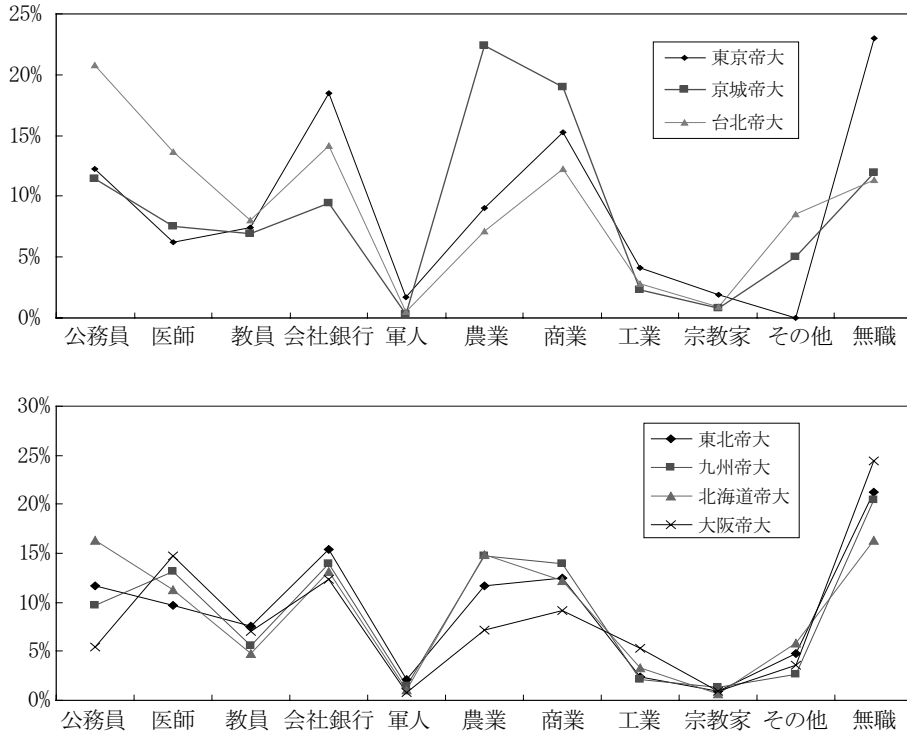


図10a および 10b 1938年7帝大における父兄の職業と家庭的背景
 教学局『学生生徒生活調査』、14-15頁より作成。

全国版の資料と台北帝大（兩付属専門部を除く）の結果とを比較すると、教員とその他の2項を除き、台北帝大の父兄の職業は東京帝大の調査結果に近い。東京帝大は日本国内の帝国大学の頂点で、学生も地位の高い階層の出身率が高い。台北帝国大学の台湾における地位も、東京帝大の日本内地における地位と同じイメージである。台北帝大文政・理農学部と付属医専の台湾人学生数と日本人学生数は、当時の台湾社会の民族人口構成の実際状況と比べると極めてアンバランスであり、実質的に台北帝大は、植民地統治者の公務員や会社員・銀行員等、中産階級家庭出身者の集合体であった。同じく植民地にあった朝鮮の京城帝大では、学生の父兄の職業として公務員の割合は比較的低位（最も割合が低いのは大阪帝大と九州帝大であるが）、父兄が農業と商業に従事する比率が他の帝大に比べて極めて高かった⁴⁸。

(2)就職の意向に関する調査

1938年台大版調査の中で、将来の就職計画についての項目では、医学部と医学専門部生は開業医・軍医と答えている。農林専門部は「大陸発展」（あるいは朝鮮を含むアジア大陸、以下同）と答えた学生が29%であったが、前述の新聞閲読に関する調査でも、彼

⁴⁸ 京城帝大は予科を設置しており、一説では、予科の入学試験を日本内地の主な高等学校の入試日と重ね、京城予科へ入学するために朝鮮へ赴く日本人学生の数を減らしていたという。

らの軍事情報に関する関心が学部の中で最も高かったことが分かっている。全体として、理農科類で中国、南洋あるいは「海外」へ進出する意思を持つ人が多いのは、日本が勢力を海外地域（中国を含む）へ拡大する際、農林理工等、技術系の人材を多く必要としていたためであろう。

家庭的背景の分析から見ると、公務員など優利な階層の出身者は、教育によって新たな専門職を身につける機会が相対的に多く、優位を保つことができた。表1は各学部と附属専門部の調査学生数を基準に計算した、学生が将来進出する職業のパーセンテージである。大学部の学生が研究を続ける割合は専門部を超え、その中でも理農、医両学部が文政学部を上回っている。文政学部は学術研究系の仕事に従事する意思が最も低く、25%の学生が将来公務員になることを望み、会社員・銀行員と教師になる意思も18%と16%の割合を占めている。理農学部では22%の学生が学術研究に関する仕事を希望し、33%の学生が企業や銀行に就職することを望み、農業や林業あるいは畜産業に進出する意欲を持つ人はゼロであった。これにより、当時の帝大生の就職事情は、技術系や研究系の職業を目標とする傾向が強かったことがわかる。また、理農学部と農林専門部の就職計画は最も多彩で、医学部と医学専門部は医師を目指す学生が最多だが、大学医学部と医専学生の学術研究を続ける希望者の比率はあまり変わらず、医学部は18%で、附属医専は15%であった。しかし、22%の理農学部生が学術系職業を目指しているのに対し、附属農林では希望する学生がおらず、両者の違いが著しい。

表1 台北帝大各学部および専門部における就職意向調査（数字は%）

	公務員	医師	上級学校	企業銀行	教師	弁護士	俸給生活	軍医	実業	畜業	学術	海外進出	農業	林業	自営業	未定	未回答
文政	25	0	0	18	16	2	10	0	7	0	0	0	0	0	0	15	7
理農	4	0	0	33	2	0	4	0	0	0	22	15	0	0	2	15	2
医	0	47	0	0	0	0	4	7	0	0	18	0	0	0	0	12	12
農専	10	0	3	15	0	0	3	0	0	1	0	29	6	1	0	25	7
医専	0	61	0	0	0	0	6	7	0	0	15	0	0	0	0	11	0

台北帝国大学学生課編『台北帝国大学学生生徒生活調査』、7、12頁のデータより作成。
「海外進出」は中国、ミクロネシアを含む。

(3)卒業生の就職先—政学科を例に

大学と専門部の就職計画と実際の状況について、ここでは政学科を例に分析し、台湾人学生と日本人学生の就職における差異を述べる。台北帝大の文政学部は、政学科の学生数が最も多く、台湾人では文政学部に所属する学生のほとんどが政学科に集中した。文政学部には「卒業予定学生名簿並就職希望調」（以下、「就職希望調」と省略する）という資料が残されており、これには、当年度の卒業生が希望する職種、関連資格の有無（例えば高等学校・中学校教師の資格を持っているか否か）、特技（大学在学中に参加したサークルや趣味活動、学生代表の経験など）、最も希望する就職先3種類が書き込まれている。当時、大学の文史法政科は徴兵猶予を取り消したため、この調査は1931年か

ら1942年に卒業した学生が残したものである⁴⁹。もう一つは「卒業生就職先別調」で、学生卒業後の実際の就職状況がよく分かる⁵⁰。「就職希望調」は、当年度の卒業生が書き込む就職志願書であり、台湾人学生と日本人学生との区別はあまり見られない。順位は異なるが、多数の学生は志願の上位3位を官庁（総督府各課等）、大学副手（あるいは助手⁵¹）、大手会社（台電、台拓等）としている。また、台湾人か日本人かにかかわらず、満洲国の公務員職は島外の職業の中で人気が高かった⁵²。また、給与の高低は職業選択の基準とされていないことも分かった。1933年当時、大学政学部副手の月給はわずか50円であり、新聞記者は59円で、満洲国の公務員養成所・大同学院の月給は60円もあった⁵³。このような状況にもかかわらず、大学副手を希望する台湾人は多かった。文政学部（主に政学科）における台湾人卒業生の就職志願および実際の就職状況については、附録を参照していただきたい。

文政学部政学科「卒業生就職先別調」によると、現在判っている政学科就職者の総数198人を基準にして、民族を区別せずに列挙した場合、企業（約42%）、官庁（約33%）、その他（約18%）、学校（約4%）の順位となる⁵⁴。民族別では、台湾人卒業生35人の就職先順位は企業（40%）、官庁（26%）、その他（14%）、学校（9%）である。日本人卒業生163人の就職先順位は企業（40%）、官庁（35%）、その他（19%）、学校（4%）である。言い換えれば、政学科日本人卒業生の3割半が卒業後に官庁入りしている一方、同じ教育を受けた台湾籍学生が官庁に就職した比率は日本人より低い。中等学校、師範学校の教職資格を取る卒業生に関して、「卒業生就職先別調」では台湾人学生・日本人学生すべてが中等学校あるいは高等学校関係学科の教師資格を獲得したとあるが、実際に台北第一師範、新竹師範、台中師範、台北一中、台北三中、台北工業等で教職に就いたのはすべて日本人であり、台湾人はいなかった。

⁴⁹ 台大校史档案「卒業予定学生名簿並就職希望調」。

⁵⁰ 台大校史档案「卒業生就職先別調」。

⁵¹ 副手制度は卒業後に同じ大学内で研究を続けるために定められた。副手は官名のない助手で、学校職員編制内に含まれず、給与は各研究室経費より支給された。学部によって給与の有無は異なり、医学部では給与無し副手が多くいた。

⁵² 台湾人にとって、島内で職を得ることは、日本人同級生と同一職場同一職種にもかかわらず、報酬の差に直面し、昇進の望めない苦悩に陥ることを意味した。これに対し、満洲国では比較的平等な機会を提供されたので、台湾籍の青年にとっては平等の夢への脱出口として認識されていた。例えば、楊麗祝・鄭麗玲の訪問録「林永倉訪問記録」において、林永倉が卒業後に新京工業大学へ就職した理由は正に「台北工業学校から卒業後、本来は台湾電力株式会社に就職し、測量の仕事に従事していたが、当時の台電で同じく台北工業学校の卒業生でも、日本人と台湾人の差別が発生しており、同じ職種でも日本人の一円五十銭の給料と比べて私は一円十五銭しか貰えない。同じ測量経路でも、私は機材を背負わなくてはならないし、彼等の測量指導をもしなくてはならない。なのに日本人は……私より六割も多い交通費をもらい、このような差別には堪え切れなかった」からであった。『台北工業生的記憶』台北科学大学、2009年、52頁。

⁵³ 台大校史档案「卒業予定学生名簿並就職希望調」。大同学院は1932年に日本が扶植した政権「満洲国」成立時に創立され、「満洲国」國務院総務庁に属し管理された、「満洲国」の近代法治国家体制を固めるための重要機構であった。当学院は「満洲国」公務員の養成センターであり、試験合格者はそこで6ヵ月から1年にわたる教育を受け、「満洲」公務員となった。1938年に実施された文官令によって政府での地位が認められた。当学院は2部に分けられ、1部は日本語を理解できる日系学生であり、2部は日本語のできない満民族、モンゴル族の学生たちより成る。鈴木健一「満洲国の成立と大同学院」『東洋教育史研究』第3集、1979年11月、15-29頁より。

⁵⁴ 卒業後、その他の学院に入学した者、自営業者、従軍した者や就職状況不明者はこの順位の計算に入っていない。

理論的には、台北帝大の卒業生であれば、台湾人か日本人かを問わず、教育概論を履修したということで、文部省より中等学校・高等学校関連科目の教員資格を取得することができる。では何故、中等学校・高等学校関連科目の教師資格を有する台湾人は、台湾本土の実業中学校や台北高等学校で教鞭を執ることが困難だったのか。筆者の研究対象である中等実業学校——台北工業学校——の教師採用状況から見て明らかなのは、実業中等学校が教師を採用するにあたっては、日本人に限定していたことを示す文言が明白に残されている。例えば、1940年に台北工業学校が台南高等工業学校に求人通知を発した際、そこには、台北工業学校は機械科、電気科に各1名教師を募集するにあたり、台南高等工業学校長に内地人卒業生の推薦を求めると示されていた⁵⁵。当校の歴代台湾人卒業生の回想インタビューによると、当時の学校長は、台湾籍学生の就職について相当熱心に配慮していた人物であったことが分かっている。ここから推測できるのは、当時、人種や民族を制限した教師採用の実情は、校長一人の判断によるものではなかったと同時に、台北工業学校の特例でもなかったことである。戦前の日本国内で明文化された規定がなかったという事実が、たとえ帝大ないし高等工業学校の卒業生であり、中等・高等学校の教師資格を有していたとしても台湾人が職に就くことが困難だった実情の最も重要な原因だったのである。

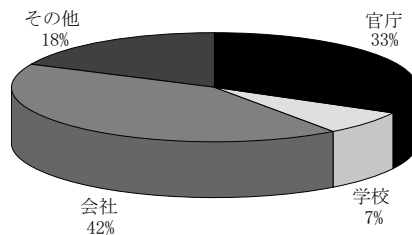


図 11 1931-1942 年文政学部政学科卒業生の就職状況

「卒業生就職先別調」より制作。

大学の副手・助手となった卒業生も、その後の状況では台湾人と日本人とで大きな差がみられる。台湾人卒業生で大学に副手として就職した者の比率は日本人の比率より高いが、数年後に離職する人数も多い⁵⁶。例えば日本人の秋永肇は、就職調査票に「大学院に進学することを希望」と記入しており、政学科の「卒業生就職先別調」と合わせて見れば、彼は卒業後文政学部政学科の助手を始め、その後講師になったことがわかる。政学科で経済史を専攻した東嘉生は1932年に卒業後、大学院（研究所）の院生となり経済学研究室の助手を兼任していたが、1937年に大学講師、1943年に助教授に昇進している。山下康雄は1932年に卒業、その後台北帝大政学科の講師となっている。他方、台湾人鍾璧輝は東嘉生、山下康雄と同年に卒業したが、1932年に政学科の副手となり、辛うじて

⁵⁵ 拙著『近代工業技術的推動者—第一所工業学校的建立与發展』第三章「経費来源与師資結構」を参照。台北：稲郷出版社、2012年3月、116-117頁。

⁵⁶ 副手は学术界の境界線にあり、抜擢される機会が少なく、将来が見えない人が多い。同級生あるいは後輩助手・副手が昇進した場合、「先輩」の立場が保てなくなるため、「後輩」長官に迷惑をかける手段として離職が道徳的だと見られていた。

1940年に助手となった。1938年に卒業した張松標も政学科の助手となったが、2人とも1942年に帝国大を離れている⁵⁷。文政学部にも所属した台湾人は政学科に集中しており、50名近くの台湾人の中には、学術研究を志す学生も少なくなかったが、日本の統治が終わるまで、文政学部では台湾人出身の教師は皆無であった。

結 論

大正・昭和前期の日本の高校生と帝大生は、将来の文化的指導者と見られていた。彼らが過去に受けた教養文化は西洋文化や外国古典文学に影響されていたため、1930年代以後は政府や研究者の間で問題視され、重大な学生運動・事件が起きるたびに政府・学校側は神経質になり、「生活調査」の名の下で大学生の思想理念に関する観察が行われた。1938年に文部省が企画した大規模な「学生生活調査」に、台北帝大は積極的に参加し、高いアンケート回収率を示した上、他校に比べてより詳しい追加調査も行っていた。この調査結果から分かるのは、1930年代以降の日本の軍国主義・国粹主義の高潮に伴い、帝大生の左翼的な傾向はすでに変化していたということである。中でも、台北帝大付属農林専門部は国策思想の影響を最も強く受けていた学部である。このことは、他学部と比べ日本映画を観賞する比率が高い、新聞では軍事関連記事を最初に閲読する、外国小説より日本の小説を多く読む、総合雑誌『中央公論』よりも大衆雑誌『キング』を好む、ヒトラーを崇拝する学生が多い、「修養」に関する調査で神社への参拝率が最も高い、国防体育指標である馬術を好む、希望就職先として海外進出に強く興味を持つ、などの調査結果から読み取ることができる。

しかし、政策的に形成された右派への転換の風潮の中でも、台北帝大生の中には、20年代以来の文化観を保つ学生も多かった。台北帝大生は映画鑑賞、雑誌閲覧と人物崇拝の面では他の帝大生と一致する部分が大きかった。外国映画の輸入が制限されていたにもかかわらず、洋画の鑑賞回数は邦画を超えていた（農林専門部以外）。好きな作家と文学作品にも外国作品の名が多く挙げられている。愛読書の1位となったのは外国の翻訳名著『大地』であり、最も好きな作家に『大地』の作者パール・バック、『戦争と平和』のトルストイ、『カラマーゾフの兄弟』のドストエフスキーなどが挙げられていた。彼らの作品は悲しく憐れな雰囲気に入れられ、リアリズムの描写で苦難に痛めつけられる農村社会を描いたり、戦争を再考させたりする描写が多く、個人の自覚を強調していたので、当時の日本極右派はこれらの作品を「青年たちの思想を腐敗させる外国書籍」と認識していた。今もこれらの作品は、中学・大学生もよく知る世界的名作である。人物崇拝に関

⁵⁷ 鐘璧輝は新聞社へ、張松標は自営業へと職業を変えた。台湾人は公職に就いても、自分の長所を発揮できない状況が各領域で普通だった。例えば基礎教育の領域で、師範学校の例を見ると、当時は「日本人教諭と台湾人訓導」の階級的關係が構築されていた。教諭である日本人は教育領域では校長等に昇進し、あるいは地方官庁の教育職務に従事することができた。一方、台湾人教師は訓導に始まり訓導に終わる場合が多く、志を持つ台湾人は契約年限の終了前に離職・転職することが多かった。『黃旺成先生日記（一・二）』（台北：中研院台史所、嘉義：中正大学、2008年9月）を参照。日記の中で、公職に就く台湾知識人の焦りと不満が散見される。

する調査では、台北帝大と日本内地大学の結果にあまり違いが見られない。当時の大学文化に、戦争を超え、日本人・台湾人が共有できる価値観と文化観が存在していたことが分かる。このような帝大生の教養状況は、教育の近代化や新聞・雑誌・映画等近代的メディアの普及によって、日本帝国内の知識青年の文化的趣向が徐々に接近していたことを示唆している。

また同時に、台北帝大の調査は学生の民族的差異を顕著に表している。台湾人学生の多い附属医学専門部と日本人学生の多い附属農林部では対照的な調査結果が見られる。例えば、附属医学専門部の外国映画鑑賞率は全学中最も高い。そして、台湾人が編集する『台湾新民報』に関しては、台湾人学生の多い医学専門部と医学部で閲読人口を多く持つ。民族的差異は就職面でさらに著しく現れている。資料不足のため文政学部政学科の例しか分析できなかったが、就職計画（志望）と実際の状況から見ると、このような民族差別のため、台湾人卒業生の専門関連の就職は強く抑えられ、同じ帝大生であっても日本人同級生と同じような出世は望めなかった。

附録 1931-1942年文政学部台湾人卒業生就職状況一覧

卒業年	名前	学科・専攻	志望就職先	教師許可証	実際就職先
1931	柯設借	東洋史学	淡水中学（内定）	○	S13 鉄道部
1932	陳欽鋤	文学科英文学	文書課通訳	*	
1933	張樑標	史学科南洋史学		○	南支派遣調査班
1933	田大熊	文学科東洋文学		高等、中学校 漢文	総督府外事部
1933	呉守礼	文学科東洋文学	S8.4.25 文政学部副手（月給 50）	高等、中学校 漢文	京都東方文化研究所、 1944年南方文化研究所
1933	魏根宣	文学科英文学		*	厦門日本総領事館
1936	林啓東	文学科英文学	学校-大学副手、教員；民間-新聞社		厦門日本総領事館
1937	黄得時	文学科東洋文学	総督府文教局（各課）調査課、外事課、 図書館、務局図書課；学校 大学副手、高 等学校、市内各中等学校；会社 拓殖会社	中等学校 修 身、教育、国 語、漢文	台湾新民報
1937	林龍標	文学科英文学	中等学校英語教師	*	新集益商行
1931	鍾德鈞	政学科	裁判所	#	S17 弁護士
1932	胡煥奇*	政学科			北京大学医学院
1932	鍾璧輝**	政学科			S7 副手 S15 台大政学科助手 S17 海南迅報
1933	陳錫卿	政学科	S8.4.18 満洲国大学院入学（月給 60）	#	満洲安東省教育庁
1933	許炎亭	政学科	新民報社記者（月給 59）		S7.2.1 新民報社（月給 59）、 大裕茶行
1933	孫萬枝	政学科	新民報社		新民報 S17 興南新聞
1934	簡建勳	政学科		#	新興製糖会社 S17 台湾製 糖株式会社工場
1934	葉松興	政学科	第一志望 総督府；第二志望 電力会社； 第三志望 台北州庁	#	朝鮮釜山
1934	王燮村	政学科	一、台湾総督府（殖産局、文教局、鉄道 部）；二、台北高等裁判所；三、台湾電 力会社あるいは台湾銀行；または本学 （台北帝大）政学科副手	#	新興製糖株式会社

卒業年	名前	学科・専攻	志望就職先	教師許可証	実際就職先
1935	顔木生	政学科	第一志望 総督府殖産局；第二志望 民間諸会社（島内に位置し、将来性のある企業）	#	S13 台湾紅茶株式会社
1935	邱春桂	政学科	(1) 満洲国；(2) 高等裁判所地方裁判所 (3) 台北州庁高雄州庁 (4) 台北市役所屏東市役所 (5) 屏東都役所	#	S17 熊本医科大学
1935	林火鼓	政学科	第一志望 台北州基隆市役所；第二志望 総督府交通局鉄道部；第三志望 三井物産株式会社台北支局；第四志望 中等学校教員	#	協発木材株式会社 S17 基隆海産物産組合
1935	林德旺	政学科	(一) 民間諸会社 電力会社、銀行、汽船会社、製糖会社、新聞社；(二) 官庁 総督府交通局、専売局、殖産局、財務局、内務局、内台北州庁；その他適応の場合	#	S17 上海新興銀業公司
1936	張格明	政学科			台陽鉱業 S17 台北帝大医学部
1936	張基炎	政学科	(1) 将来は研究を続けるか、研究と両立できる職種を希望；(2) 民間会社でもよい		新興製糖株式会社 S17 台湾製糖株式会社
	江維敦	政学科			
1936	林水国	政学科	銀行、新聞社、保険会社、汽船会社；満洲国		S17 広東省中山県日語専修学林；広東日本商工会議所
1937	陳加溪	政学科	第一志望 会社 (1. 台湾拓殖会社 2. 製糖会社 3. 新聞社 4. 保険会社)；第二志望 官庁 (総督府)		台大医学部学生 S17 卒
1937	馮正枢	政学科	(一) 政学科副手を最も希望；(二) 官庁と民間会社、島内外ともよい；希望：1. 官庁：総督府 (文教局もしくは殖産局) 2. 民間諸会社：新聞社もしくは製糖会社 3. 島外の場合は東京あるいは満洲国を希望する		高雄地方裁判所
1937	黄国鎮	政学科	(1) 官庁 → 総督府 (第一志望) あるいは地方州庁 (2) 民間諸会社 → 製糖会社、拓殖会社 (3) 島外 → 満洲国		台北州基隆稅務出張所
1938	王江村	政学科	満洲国、総督府専売局、台湾拓殖会社、製糖会社；南洋方面；台湾電力株式会社		S17 満洲興業銀行傳家旬支店
1938	張松標	政学科	東京あるいは大阪株式会社取引所	※	S13.6.11 文政学部助手 S17 自営業
1938	林緒成	政学科	総督府文教局、内務局；台湾電力株式会社、台湾拓殖会社、新興製糖会社 (高雄州鳳山郡)；台湾日日新報社、台湾新民報；台湾銀行、台北商工銀行、勸業銀行；南洋方面の会社		嘉義市
1938	林維吾	政学科	第一志望 官庁：総督府 (殖産局、専売局、文教局、鉄道部)、拓務省、内務省 第二志望 会社：台湾拓殖会社、電力会社、製糖会社；第三志望 副手		外事部調査課
1939	王友昂	政学科		※	S17 台湾製糖株式会社工場 新興製糖株式会社
1939	劉行戊	政学科		※	S17 台湾製糖株式会社工場
1939	石宏基	政学科		※	S17 華南銀行
1939	辛文恭	政学科			S17 台湾輕鉄株式会社
1939	莊棕耀	政学科		※	S17 上海特別市政府
1940	辜振甫	政学科		※	S15 大和物産株式会社、満洲製糖株式会社
1940	許昆元	政学科			S17 満洲国官庁
1940	林榮聡	政学科			S17 杉原産業株式会社

卒業年	名前	学科・専攻	志望就職先	教師許可証	実際就職先
1941	林瑞庚	政学科			
1941	鄭吉珍	政学科			
1941	楊錦鐘	政学科			S17 興南新聞社
1942	蘇瑞麟	政学科			S17 興南新聞

第四欄「志望就職先」の内容はすべて「卒業予定学生名簿並就職希望調」にある卒業生の自叙を引用したものである。

○は高等学校日本史、東洋史および中学校歴史教師許可証を有することを示す（史学科）。

*は高等、中等学校英語教師許可証を有することを示す（文学科英文）。

#は高等学校法制および中学校経済教師許可証を有することを示す（政学科）。

※は高等学校法経教師許可証を有することを示す（政学科）。

* 胡煥奇は原籍台中市だったが、後に中華民国籍に改めた。

** 鍾璧輝は1940年に助手であった際に、「韓非子ヲ讀ム（邢治主義カ徳化主義カ）」を発表し、『政学研究年報第六輯』に収録されている。

資料は台大校史档案「卒業生就職先別調」、「卒業予定学生名簿並就職希望調」および『台北帝国大学研究通訊』創刊号「政学科」部分を整理したものによる。

（原文：中国語、日本語訳：王莞晗）